

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（六） -第三編下帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2018-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19252

墨川亭雪麿 『傾城三國志』 翻刻 (六) — 第三編下帙 —

神田 正行

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、文章を読む順序を示した「合印」(あひしる)は、その多くを形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻(五丁の単位)」ごとに改段を施した。
- 一、見開きが改まる位置には、「(4ウ・5オ)」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三國志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館(江戸文芸文庫)蔵本を用いた。

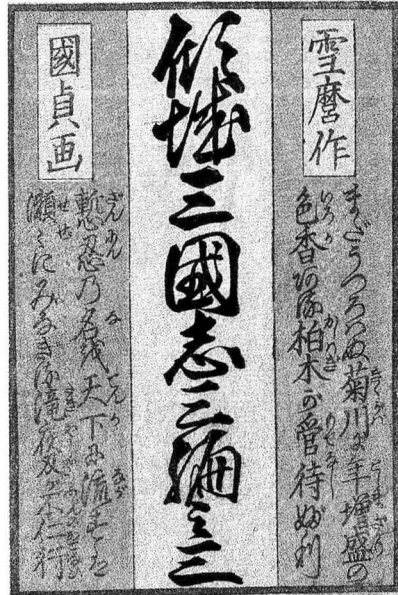
《第三冊 表紙》



傾城三國志三編 下帙上冊
癸巳新刊

袁術 【▼駒絵内。中央は本作の色彩】
雪麿作 国貞画 喜鶴堂梓

《第三冊 前表紙見返し》



雪麿作
まだうつろはぬ菊川に 年増盛の色香ある 柏木が管待ぶり

傾城三國志三編之三

国貞画
慙忍の名を天下に流すは
瀬々にみなぎる 滝夜刃が不仁行

▼中央の題号は濃墨。左右の地に薄緑色を使用する。

(五)

滝夜叉はせん術すべなさに、「今我々は目をつけられて、捕らへられんとするものなれば、いづくにもせよ心なく、久しく留とどまることをせず」と、言ひ捨ててゆくを柏木が、「妾めかけいさゝか真心もて、僕しもに命じ若鶏わがの、かしわを料理て肴となし、酒を勧めて二方を、もてなさんとしたりしを、無下にし給ふは何事ぞ。我が一夜ひとよさの宿りをば、争ひ給ふことかは」と、恨むを耳にも聞き入れず、背そむの方は



(21才 滝夜叉、柏木を斬らんとする)

見返らで、ますく足を速めしが、五足もも六足歩むうち、

滝夜叉はたばさみし、刃をひらりと引き抜きて、引提ひきげしまゝにたちかへり、柏木を斬らんとす。月夜ながらも影曇り、定かに様子は見え分かねども、それと悟れば宮居は慌て、声を低うしおし止め、「やよ過ちなし給ひそ。彼には何の罪かある」と、支えし手もとを緩ゆるさねば、滝夜叉も小声になり、「柏木我が家にたち帰り、家内やうちの

上へより死人を見る時は、御身みみと一人の仕業しわざなりと、やはか悟らでおきなんや。しからばたちまち我々を、此まゝ見逃すいはれなし。これ禍わざはひのもとなり」と、言ふを打ち消し宮居が言ふやう、「こは御身みみにも似合はざる、言葉をは聞くものかな。目前父の側女そばめならば、御身がためにも親しき仲なり。そを殺さんとは何事ぞや。殊ことに以前は知らずして、殺したれば是非もなし。今はそれと知りながら、殺すはいたく不義ならん」と、次つぎへ(21才)／

続き言へば滝夜叉あざ笑ひ、「よしや妾は天下の人に、背くとも天下の人の、妾に背くことをやめん」と、言へば宮居はひと言の、応こたへもなく黙然たり。■／■滝夜

(21ウ・22オ 宮居 滝夜刃殺害をためらう)



刃がこの一言は、その残忍をあらはして、後々までも人のために、罵り譏らるゝはしなりけり。▲

▲されば宮居は滝夜刃を、なだめて共に行く道は、巷里あまりも来たりしが、互ひに交はず言葉もなく、月は限なく冴え渡るに、滝夜刃宮居に相談して、とある旅籠屋の門うち叩きて、ひと夜の宿りを求めつゝ、二人ともにひと間に至り、少しの酒を酌みかはし、宵の疲れを休めしが、滝夜刃肘を枕にして、転、寝をしたりしに、宮居はひとりつくくと、思案をするに、「滝夜刃は、世に稀なるべき賢女なりと、思ひとるまゝ、宮仕への、道をも捨ててこの人に、つきてこれまで来たりしかど、邪険無慙の女なり。我いつまでも此人につきて、おらんは甚だよろしからず。後はた如何なる憂ひをば、引き出ださんも測りがたし。今此女をたゞひと打ちに、討つて捨てなば我のみか、天下のためにも妨げと、なるべきものゝ根を断つ道理、しかなりく」とうち頷き、秘かに刀を引抜き、滝夜刃が頭をのぞみ、すでにその手を下さんと、したりしかども「待てしはし、妾は国家の為にもと、彼に

つきたるばかりなり。今彼を殺すは義ならず。こは彼をうち捨てて、我のみ一度故郷に帰り、親夫にも会はんにはかず」と、胸を極めて刃を収め、そこ〜に身支度なし、人知れず立ち退きしが、いまだ夜明けに至らねば、「夜の間」に道を稼がん」と、故郷さして急ぎけり。

こなたには滝夜叉姫、宵の疲れのそが上に、少しの酒に眠気ざし、心ともなくまどろみし、夢は馬屋の鈴の音、嘶く馬の声に破られ、頭を上げてかたはらを、見れば東の明かり窓、はや白みたる有明の、行灯のみぞ残りぬて、宮居は影だに見せざれば、「我此ごろの疲れにて、思はずまろびし肘枕。熟睡せし間にかの女は、我を外せしものなるべし。彼我が言葉を不仁と疑ひ、逃げ出だせしも測られず。我もまた此ところに、久しく止まるべきにあらず。少しも道を急がん」と、やがて支度を整へて、夜を日に継いで急ぎしかば、程なく故郷次へ（21ウ・22オ）／続き猿島に、帰り着きて館に入れば、親姉妹はいふに及ばず、腰元はしたの者までも、まつその無事を喜び聞こえ、又いかにして以前のごとく、数多の従者をも

召し具さず、帰り来たれるよしを問ふに、滝夜叉姫はかやう〜と、過ぎ来しかたり、▼「の」カ】物語を、詳らかにもの語り、さてその後は人を遠ざけ、秘やかに語らふは、「妾つらく思ひはかるに、此度家に蓄えたる、金銀米銭をことごとく、散らして諸方の女兵を招き、董根を討ち滅ぼし、その勢ひをもてあはよくは、世盛りなりける、藤原時平一家を平らげなば、やがては天が下をも握るは、瞬く内にあらずや」と、席を叩きて説き示せば、妹なりける桔梗姫【曹仁】、菖蒲姫【曹洪】もろとも、「いとしかるべき事にこそ」と、うち喜ばば母君なる、高峰前【曹嵩】は眉根を寄せ、「そはよき企てなりけれども、金銀の助け少なき時は、うまく事をばなしえがたし。汝が乳人なる、印旛の阿沼蘭【衛弘】といふもの、夫は世々の分限にて、彼この館に奉公して、殿良将主はさら也、妾も共に恵みたる、恩を受けしはいくばくならん。さる間彼にはかりて、金銀の助けを得ば、事は果たして成るべし」と、母が教えに滝夜叉姫、喜ぶこと大方ならず、その日使ひを走らせて、乳人阿沼蘭を



(22ウ・23オ 阿沼蘭、滝夜叉に同心する)

呼ばするに、故主の仰せ重ければ、取るものも取りあへず、奥館に入り来たる。

滝夜叉は妹 姫らと、共に酒宴を開きつゝ、阿沼蘭が来たるを待ちつけて、滝夜叉はまづ阿沼蘭に向かひ、互ひに無事にて喜ばしき、よしを告げたるその後に、杯を上げ酒を勧めて、さて物語りて言ひけるは、「今都にて東の御殿は、まだいわけなき姫御子の、主となりてまし〜つ、董根専ら我意を振る舞ひ、御殿を奪ひ諸人を、苦しむれども誰ありて、これを支ゆる者もなく、▲右へ／

▲左より 齒を食ひしぼりて手を空しく、眺め暮らすばかりなり。わなみこれを憤り、思ふこと甚だしく、いかにもして董根を、滅ぼしなと思へども、只恨めしきは力足らはず。おことは常に我が家に、ちなみあるのみならず、真心厚き性なれば、此ことを告げて手助けと、なさんと思ふはいかにかあらん」と、問へば阿沼蘭は膝おし進め、「よくこそ思し立ち給ふ。■／■さすがは親父良将公、ならばびて兄君将門公の、武勇を受け継ぎ給ふにや、御心猛く御思量逞し。妾も及ばぬことながら、此ことを



（23ウ・24オ 滝夜刃の親族集う）

思はぬにはなけれども、力を合はせん人もなく、ことに卑しい賤の身なり。都とこゝとは遠く隔り、とても及ばぬ事也と、うち捨ておきしに姫君たち、はや此大事を企て給ふは、願ふてもなき天下の幸ひ。夫に勧めていくばく金の、軍用を送りまらせん」と、答ふる言葉潔ければ、三人の姫はうち喜び、**次へ**（22ウ・23オ）／**続き**「しからは東の御殿よりの、おん下知下れりと披露なし、董根追討のことを告ぐる、巡らし文を諸方へ出だし、義兵を招かん」と言ひ合はして、忠義の二字を筆太に、下給の国境に立てぬれば、これを見て集まり来たる、女房の数多ある、そが中に滝夜刃姫が、兄なりける大葦原四郎、将平が妻常夏【夏侯倅】、それが妹岩淵【夏侯淵】姉妹、数多の勢を引き連れ来たれば、しりへに従ふ女房二人、信楽【楽進】・玉蔓【李典】と呼びなしたり。皆馬をせめ槍を使ひて、戦の用意大方ならず。

さる程に印旛の阿沼圃は、家の財を出だし尽くして、鎧兜旗差物、陣羽織小袴まで、みなことごとく買ひ調へて、持たざる者にはこれを与へ、その他兵糧を運送す

ること、かつてその数をはからず。こと大方に不足なければ、集まる勢を一つになし、木曾路よりおし上り、近江国醒井に、屯を構へ諸人の、馳せ至るを待ちてをり。

こゝにまた初糸【袁紹】は、先にも説きおけるがごとく、本院の大臣、時平公の御弟、仲平公のうまごにて

【▼本稿(四)】の系図参照。本誌第五二二号六五頁、

都に住まひせしかども、滝夜刃姫が東の御殿の、御下知を受け忠義の戦を、起こす由の文を見て、「おのれも東の御殿にとりては、由縁なきにもあらずして、殊にさる頃董根が、東の御殿を傾けんと、するの兆しを悟りぬれば、彼と言葉争ひを、なしたる事もあるのみならず、もとよしかの董根を、討ち滅ぼさんの心あれば、たちまちおのれが手につきたる、者を招きて此度のことを、計るの中に、出来秋の豊田【田豊】、赤紫の組交【沮授】、月碓の手杵【許攸】、海上山椎柴【審配】、割床の臥猪【郭図】、黄昏の夕顔【顔良】、金蒔絵文車【文醜】

▲左より なんと、いふ者あり。みなことごとく滝夜刃が、招きに従はんと評議を決して、数多の手勢を引き連れて、

近江路へ馳せ下り、滝夜刃姫が手に加り、△/△戦評定とりぐなり。

その余諸方より集まる者には、初糸が妹色糸【袁術】、躬恒の妻笹の前【王匡】、貫之の妻橘立御前【喬瑠】、肆の鮑【鮑信】、古琵琶の四結【孔仙】、若竹の節根【韓馥】、遠山の黛【劉岱】、唐文の文卓【張邈】、夏陰の道水【袁遺】、鬚括文亮【孔融】、近江路の弥高【張超】、伊万里焼陶野【陶謙】、御茶漬の寿【馬騰】、金目貫曾我菊【張揚】、純友の母堅田【孫堅】、色糸の姉次へ(23ウ・24オ)／続き初糸らなりけり。皆はるぐの所より、此地へ来たりて滝夜刃が、手に加るそが中に、通神玉章【公孫瓚】は加賀の国、篠原の者なりければ、手勢を引きて近江へ来たるに、越前国三国を過ぐ。しかるにはるか向かふを見れば、桑の木ひとむら茂りたる、小山を野風炉・茶弁当など、とり持たして遊山なし、慰む者ありけるが、■/■玉章を見ると等しく、みなひたくと此方に来たりて、一列に拜伏しぬ。玉章これをつらく見れば、大桑の玄妙【劉備】なれば、玉章は身



(24ウ・25オ 玉章、玄妙と再会)

を進め、「こはくいかに」とばかりに、絶えて久しき
 対面を、喜び聞こえしその後、に、「御身いかにしてこゝ
 にをはする。その由聞かめ」と訝れば、玄妙につことう
 ち笑みて、「玉章姉御は忘れ給ふや、妾さる頃此ところ
 の、寨一つを預かりて、はやいくばくの日ごろを経たり。
 今日しも暇あるまゝに、村々をも見がてらに、そゞろ歩
 きをするになん、たまゝ姉御にあひ会ふて、喜びこれ
 に増すことなし。つきては御身幸ひに、妾が守る寨に來
 たり、まづ諸人をも懇はし給へ」と、勸むれば玉章は、
 関路【関羽】・飛鳥【張飛】を指さして、「かしこの二人
 は何人によ」と、問へば玄妙答へて言ふやう、「彼らは
 関路・飛鳥とて、妾と義を結びたる、兄弟にて侍るなり」
 「しからばさる頃御身もるとも、黄巾の賊婦らを、討ち
 破りたる人々なるや。見申せばいさゝかの、官位も
 なしと思はる。あはれよき姫たちを、空しく埋み置きな
 んこと、恨みの第一なりかし」と、玉章が挨拶に、玄妙
 はかの二人の、女を呼びて対面さするに、玉章が又言ひ
 けるは、「汝たちもほの聞かれけん、下へ 上より今董

根御殿ねごどのに入て、あぎやうむりやう【▼「悪行無量」カ】を働くものから、世の中いたく乱れつゝ、もろくの女房たち、彼を誅せんと思ふになん。おことらもかすかなる、俸禄に縛られて、この塞にをらん【▼「より」脱カ】、むしろこゝをばうち捨てて、妾と同じくかの賊婦、董根を討ち東の御殿ごどのを、助けんにしくことあらじ。此こといかに思すにか」と、言へば玄妙一議もなく、「そもとよりの願ひなり。苦しからずは伴はれん」と、言へばかたへの関路と飛鳥、口を揃へて言ひけるは、「玉章ぬし我が輩ともがらも、従ふことを許し給はゞ、かの賊婦董根とうこんが、首引き抜きていさゝかの、次へ (24ウ・25オ) / 続き 功いさををあらはし今日けふの上の、賤しきを逃れん」とて、すぐさま寨にたち戻り、そこく用意しつ、玄妙・関路・飛鳥らは、数多の手勢を引き連れて、玉章に従ひて、近江路さして至りけり。

それはさておき滝夜刃姫が、招きによりて諸方より、来たり集まる女房らは、すべて十八頭【▼「十八鎮諸侯」にて、陸統として引き続き、広き馬屋の醜さめが井も、

鎌を立つべき寸地もなく、おのく持ち場くを預かり、幕うち回し飯屋を構へ、戦ひの用意大方ならず。滝夜刃喜びに堪へずして、それくの持ち場にゆい行きて、めいゝに挨拶なし、しかして後のちに諸々の、女房らを一つに招き、酒の筵じりょうを開きつゝ、戦を進むる謀はかごとを、はからふ中に躬恒の妻、筐かたみの前が席を進みて、「今かく大事を起こさんには、必ず人の器量を見て、頭かしらたつ者を立てて、これを総大将とあがめ、わなみをはじめ諸々の、■ / ■ 女房たちもかの人の、指図約束を聞入れなん。しかして後のちに進まねば、おのくおのれくが、心々になりもてゆき、戦いくさの手つがひよろづにつけて、たより悪しからんと思ふはいかに」と、理をせめ言葉淀みなく、言へば数多の女房らも、「此こともつとも理ことばりあり」と、答へながらもへりくだり、相互あひひにおし譲りて、誰たれよからんと言ふ者なし。その時

六の巻へ (25ウ)



(25ウ・26オ 勇婦ら、盟主を選ぶ)

(六)

五の巻より滝夜叉あたりを見回し、「これにをはする初糸ぬしは、琵琶の大臣仲平の、うまごにして東の御殿に、ちなみも深き人なれば、挙げて総大将となし、此人の下知を聞かめ」と、言へば初糸恥じらひたる、面持ちにてさし俯き、「こは思ひもかけぬことなり。身不肖なる妾なんどが、各々の上に立んこと、上へ下より思ひもよらぬことなり」と、二度三度おし譲るを、数多の女房かたへより、「初糸ぬしにあらざりせば、誰か又これに当たらん。ひらに受け入れ給へかし」と、勧めに初糸詮方なく、まづその勧めにうち任し、その次の日にうち開けたる、ところを見立てて、三段の壇をつきたてて、あたりにひしと小旗を立て、上には白き旗、黄なる斧を立てたりけり。初糸衣服を清らにして、腰に長き刀を佩き、此壇上にうち上り、香を焚き拜をなし、謹み告げて申すらく、「東の御殿幸ましますと、董根権を専らにし、いともかしこき方様に、禍加り国民には、毒流れて苦しみぬ。国の掟は絶え廃れ、次へ(26オ)／続き宮寺は



(26ウ・27オ 初糸、総大将となり天地を拜す)

傾き危うし。今初糸諸人と、共に大義を企てて、世を安らかにせんと欲す。およそ誓ひを同じうし、心等しく力を合はして、もてその守る所を尽くさん。もしまた誓ひに背く者あらば、天人ともに誅すべし。御霊姫靈おはさば、肺腑を照らしをはしませ」と、言ひ終はりて諸人と、血をすゝり誓ひをなせば、壇のもとに並みあぬる、数多の女房身の毛を立て、齒を食ひしぱり小躍りなし、おのゝ董根を討つて取り、東の御殿の安からん、ことを思ふのみなりけり。

やがて初糸壇を下れば、みな手を取りて下へ上より設けの席に、助けをらせて礼をなし、少しく官位に従ひ、年の齢のほどに習いて、二ながれに居並びたり。滝夜刃やがて指図なし、酒肴を持ち運ばせ、杯を巡らしつゝ、座中に向かひて言ひけるは、「今日しもかく、総大将を立てたる上は、誰々もその人の、言ひ付けを守り自らが界を、争ふことを慎めかし」と、言へば初糸かたはらより、「我が身諸人の、思はん程も省みずして、勧めに任せ、
▲左の上へ
▲右の下より総大将となりにたれば、

黜いさまあらば必ず褒めん、罪あらば罰せざらんや。国には常
 の戒めあり、戦いくさに定まる掟あり。汝なんたちこれらを合点がてん
 して、必ずな犯し給ひそ」と、懇ろに言ひ諭せば、諸人ら
 一同に、「いかでか旨に違たがはんや」と、言ふに初糸再び
 言ふやう、「我が身が妹いも色糸いろいとに、兵糧まぐら馬草うまぐさを掌つかさど
 陣屋々々に配らしめて、これらにことは欠かせまじ。誰たれに
 もあれ先手まゝとなりて、直たに相坂あふまかの関に至り、ひと手を
 もつて敵に向かひつ、余はみな各々險しき場所に、陣を
 張りてかのひと手と、応ずる事を旨とせん。誰たれか諸うべなひ給
 はんや」と、かたはらを返り見れば、伊予の掾せう純友が、
 母の堅田かたは進み出で、「我が身才は足らねども、先手まゝと
 ならんは願はしけれ」と、言へば初糸喜びて、「御身は
 勇氣逞しければ、此役目こそ相応しからめ。つきてはこ
 れなる次つぎへ（26ウ・27オ）／／**続き**杯を、まづ御身に参ら
 して、その門出かどいを祝さん」とて、さす杯を堅田は干ほして、
 それより己おのれが持ち場に帰り、しきりに戦いくさの用意を整へ、
 勢いきほひにうち任し、相坂の関において至れば、関守厳しく
 関を守りつ、早馬をもて此事を、東山なる董根に、とく

告げ知らせたりけるが、董根権を振るひし後は、日ごと
 に酒宴を設けつゝ、夜は更こ闌うたけてやみにけり。

かゝる所に相坂の、関より早馬到来して、急を告ぐる、
 告げ文がみをもたらしたれば、杏からも【李儒】これを受け取りて、
 急ぎ来たりて董根に、そのことを申すにぞ、董根驚く事
 大方かたならず、急に数多の女房らを、召し集へて言ひける
 は、「今初糸・滝夜刃ら、諸方の女を集へ集め、にはか
 にことを起こしつゝ、その手の軍兵相坂の、関のあなた
 に来たりといふ。汝なんたち何の妙策ありて、此軍兵を追ひ
 退しりぞけん」と、言へる言葉の下よりも、玉川の調布たうふ【呂
 布】は、身を進めてうちほう笑み、「母人さのみな気を
 揉み給ひそ。わなみ関のあなたなる、女兵をうかゞひ見
 る所、塵か芥のごときのみ。我が身自ら兵つはものを、引きて彼
 らが頭かづを斬り、獄門の木にさらさん事、我が身が願ふと
 ころなり」と、言へば董根喜びて、「我に御身のあるも
 のから、枕を高く眠らんのみ」と、言ひも果てぬに調布
 が、背そむの方より進み出づる、二八ばかりの一人ひとりの娘、
 容かたちには似ず声高く、「鶏を裂くに■／■いづくんぞ、牛



(27ウ・28オ 華籠、出兵を志願する)

の刀を用ひんと、いふ諺のあるぞかし。調布ぬし必ずしも、御身が手を下すに及ばず。我が身数多の敵將の、頭を斬るを見ることは、袋を探りて物を取るのみ。さは思さずや」と広言吐くに、○右へ／＼○左より董根そなたをうち見やれば、ひきもの華籠【華雄】とて、名に聞こえたるお転婆娘、口も八丁手八丁、大津わたりに鳴り響く、金棒引きの骨頂なり。董根喜びとりあへず、【李補】・夕月【胡軫】・一本【趙岑】の、三人を添へて華籠に、数多の手勢を預けつゝ、相坂の関に向かはしむ。

それはさておき此方には、諸方より集まりたる、女房のそが中に、肆の鮑が、おのれつらく思案するやう、「此度先手の大将と、なりたるは堅田なり。彼もし大功をあらはさば、全てわなみは埋もれ木の、花咲く手柄をなしがたからん」と、思慮をめぐらし秘やかに、【次へ】(27ウ・28オ)／続きおのれが妹 簀虫【鮑忠】と、いへる者に手勢を預け、脇道より抜け駆けさせ、たゞちに關所の左へ／＼右よりもとに至らせ、戦ひを挑ましむ。あなたには華籠が、兵 数多従へて、簀虫と向かへ戦ひ、お

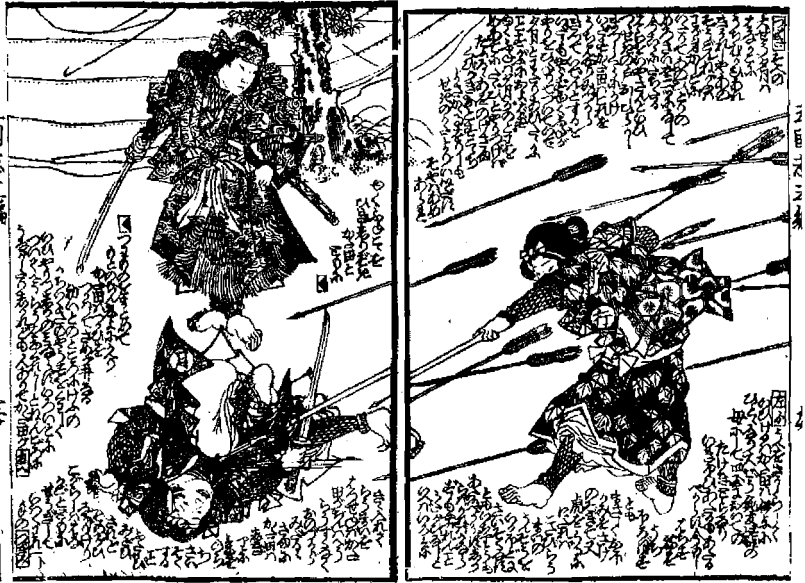


(28ウ・29オ 華籠、糞虫を討つ)

めき叫んで言ひけるは、「やよ糞虫の弱虫め、我と勝負を決せんとは、飛んで火に入る夏の虫、自業自得に命を失ひ、音にのみ鳴くとも及ぶまじ」と、嘲り罵る広言を、聞怖ぢなしたる糞虫は、踵をめぐらし退くを、「やらじ」と華籠追ひすがり、きらめく刃を振ると見えしが、糞虫が素頭は、飛んで地上にまるびけり。華籠は此勢ひに、乗りて多くの兵を、あるひは▲右の下へ▲左の上より生け捕りあるひは斬りとり、使ひを立てて糞虫が、首級をもたらし董根に、献じて手柄をあらはせば、董根これに恩賞を、重く与へしのみならず、また兵を増し与へ、なをこの関に留めをらしつ、「敵地へ踏み込み敵兵を、軽しむることなかれ」と戒む。

さればまた、伊与の堅田は、四人の女将を従へたり。一人は冬川の行舟【程晋】とて、一筋の長槍を使へり。次は秋山の黄葉【黄蓋】とて、鉄もて作れる鞭を使ふ。次は春雨の海棠【韓当】とて、ひと振りの、長刀を手練なす。次は夏木立茂枝【祖茂】とて、両刀使ひの達人なり。堅田がその日のいでたちは、白銀の小鎖もて、綴り

(29ウ・30オ 行舟、夕月を討つ)



なしたる腹巻に、丈なる髪を振り乱し、赤地の錦に、鉢鉄入たる鉢巻き締め、手には氷の刃を握り、関の方を指さして、大音に罵り言ふやう、「悪を助くるおのれが輩、何ぞ早く降参せざる。下れく」と仕掛くる喧嘩、聞いて怵へぬ華籠が、次へ(28ウ・29オ)／続き副への大将夕月は、華籠にうち向かひ、「あれ聞かしやれや、あの雑言、願ふは我が身かしこに至りて、あの一の女郎才を、二ツになして今こゝに、立ちたる腹を癒さんと、言ひつゝ、関の戸押し開かし、まつしぐらに駆け出です。堅田はこれをうち見やり、自ら切つて出でんとするを、出だしもやらず行舟が、槍をひねりて突いて出で、夕月と渡り合ひ、戦ふこと数合に及ぼす、行舟は夕月が、喉輪を目当てにたゞひと槍、突けば倒るゝ仰のけざま、首かき落とす心地よき。かゝる折しも関の方より、射出だす征矢は雨あられ、行舟こゝを引き退き、堅田と共に

■／兵を、まとめてもとの陣所に帰り、堅田は使ひを遣して、醒井なる初糸の、ところ今日の勝ち戦の、様子詳しく言ひやりつ、しかのみならず色糸に、ついて

「兵糧を送れかし」と、懇ろに促したり。しかれども、人ありて堅田が右へ／＼左よりうへを、さかしらして言ひけるは、「堅田は伊与に人となりて、大掾純友の母にして、四国においての猛き虎なり。勢ひあたかも当たるべからず。今もし董根を討ち滅ぼすとも、まさしく狼を避け除きて、又虎を得るに似たれば、此度糧米の運送を、いかほどに催促なすとも、一粒も与ふべからず。しからば彼は必ずしも、敗れんこと疑ひなし」と、言へば色糸

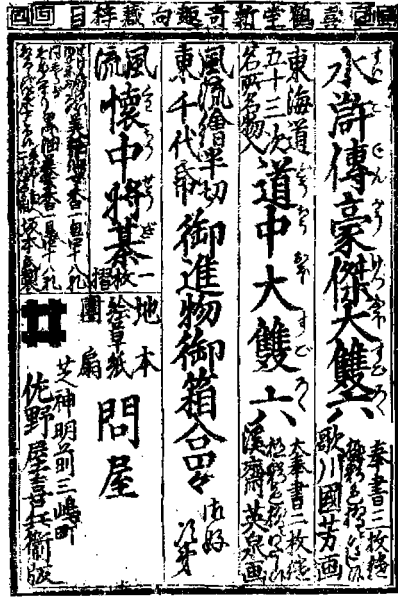


(30ウ 華籠、海棠を追う ▼右上に「もみちは」)

聞入れて、糧米を發せねば、堅田が陣は兵糧少なく、自づから乱るゝ様に、堅田はしきりに氣をいらち、催促すること二度三度、されどその甲斐なかりけり。

風は華籠と、共に商議してはいはく、「我一手の次へ(29ウ・30オ)／＼続き軍兵を、引て小道を探り求め、それより堅田が陣所の後ろを、襲ひ撃たんと思ふ也。御身夜半の頃に至らば、秘かに堅田が陣に赴け。差し挟んで討ち取るべし」と、言へば華籠「そはよからん」とて、しきりに馬に馬草を飼い、軍兵には兵糧を与へ、用意すること大方ならず、しかもその夜は月白く、風清らかに吹き通ひ、堅田が陣所に至る頃ほひ、すでに■／＼これ夜半なり。鬨を作り鼓を鳴らし、直ちに攻めに攻めたつれば、不意を打たれて驚く堅田、慌てながらも鉢巻き締め、刀を舞はして切りめぐるに、華籠に行きあふて、戦ひ数合に至らぬうち、背の方にて鬨をあげ、風が軍兵ども、たて挟んで火を放てば、堅田が上のかたへ／＼下より軍兵糧を絶やせば、自づからしどろに乱れて、○／○危ふさ限りなかりけり。

《第三冊 後表紙封面》



▼奥目録「喜鶴堂新奇趣向蔵梓目」。前年のものと
同内容。

《第四冊 表紙》



癸巳新刊

公孫瓚 ▼ 駒絵内。中央は本作の玉章

雪麿作 国貞画 喜鶴堂梓

傾城三国志三編 下映下冊

《第四冊 前表紙見返し》



通れ堅田の危急を救ふ 忠義は比ひ夏木立

しげり枝がとり替たる 赤憤の赤心 雪麿作

けいせい三国志三編の四

温酒の冷ぬ間に ひゆる氷 刃の庖丁

仇を膾に関路が手料理

国貞画

▼題号・編次に濃墨を用い、その背景と作者名・画工名の地に薄縹色を使う。

(七)

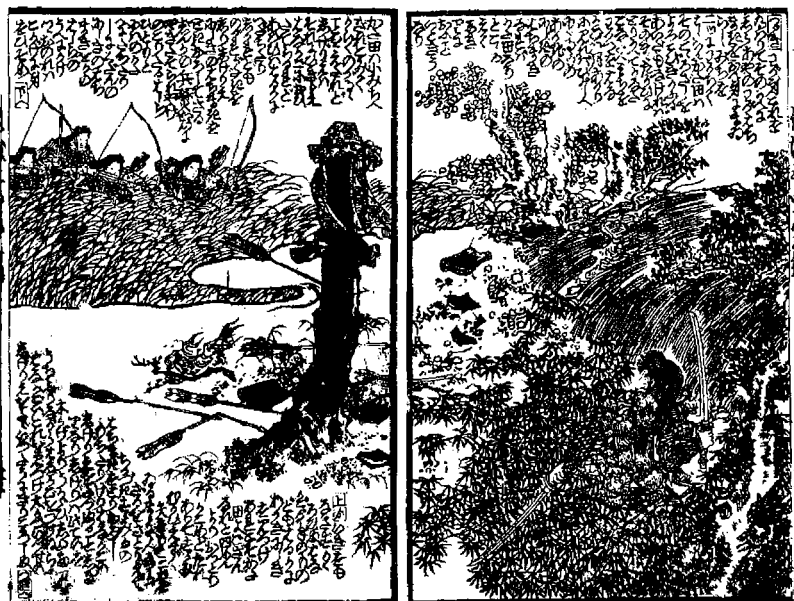
堅田はやうく身を逃れ、走るあたりに喚く声、しばらくも絶へざるに、行舟・黄葉・海棠ら、各々堅田を見返らず、おのれくに逃げ走る。たゞ夏木立茂枝のみ、堅田がしりへに◆／＼従ひて、又五六十人の手の者と、囲みを突いて出でたりしが、後ろより華籠が、追ひ来たるを堅田は帰して、又戦ふこと十余合、堅田は偽り□／＼逃ぐるをば、華籠「やらじ」と追ひかくる。堅田は後



(31オ) 堅田、華籠を狙う

ろを振り返り、続けざまに二条の矢を、放てども華籠が、ために追はれて息たゆく、氣力疲れてやうく、第三の矢を放つとき、持ちたるを引き折りたれば、弓を彼方へからりと投げ捨て、小笹茅原生ひ茂る、林の内をかき分けかき分け、逃ぐる折まで茂枝は、傍ら去らで従ひたるが、堅田に向かひて言ひけるは、「御身の頭にいたゞき給へる、赤地の錦の鉢巻きは、人目に立ちて敵方に、これを狙ひて射らんこと、いとも危ふき限りにこそ。此鉢巻きを取り給へ。」次へ(31オ)／＼続き我が身これを給はりて、その代へに白綾の、我が鉢巻きを御身に参らし、道を二ツに分ちて走らん。堅田はその志を喜び、着替ふる間もなければ、そのまゝ互ひに取り替へて、かなた此方へ道を分かつを、華籠は月明かりに、見れば東へ逃ぐる者あり、赤地の錦の鉢巻きなれば、堅田なりと心得て、しきりに追ふこといと急なり。

堅田は小道へきれこみて、辛く逃るゝことを得たれど、茂枝はそれに引き替え、華籠に追ひたてらるれど、間は遙かに隔ちたり。しかれども逃れがたきを知り、茂枝錦



(31ウ・32オ 茂枝、敵を欺く)

の鉢巻きを、解きおろしてさる人家の、兵燹へうせんに焼きたてられ、焼け残りたる柱一本、庭のかたへに立ちたりしに、件の錦の鉢巻きを、かの柱の上にかけてつゝ、おのれは木陰に身をひそめ、**下へ** / **上より**息をもなまず隠るひぬ。

華籠が手の者ども、遙かに赤き錦を見付け、「あれこそ堅田よござんなれ」と、四面よりおつ取り囲めど、誰ありて進み向かひ得ず、矢をもてこれを射るに、人ならざるを悟りえて、近付き進みかの鉢巻きを、取りおろし持ちたりけり。華籠は茂枝を、尋ねることしきりなり。

茂 **▼**「枝」**脱** は此体こていを、木陰よりうかゞひ知り、両刀をうち振りながら、華籠をつけ狙ふ。華籠はこれを見付け、大喝一声茂枝を、たゞ一刀に斬り殺しぬ。**次へ**
(31ウ・32オ) / **続き** 心優しき乙女おとめをば、無惨の刃やいばにかけたたりしは、いと惜しむべき事ぞかし。華籠は夜戦やいくさに、勝ち誇りつゝ兵をまとめて、関の上かみへと引き取りぬ。

行舟・黄葉・海棠らは、堅田を尋ねやうやくに、無事にてありし体を見て、まづ喜びを述べ聞こえ、討ち漏らされたる軍兵ぐんべうを、集めて陣所へ引き返す。堅田は此度こたびの

夜戦に、うち負けたるのみならず、茂枝に討ち死させしを、いとゞしく悼み悲しみ、しばらくこれを忘れず。

それはさしおき醒井なる、初糸が屯には、早馬来たりて夜戦に、堅田はいたくうち負けつ、しかのみならず茂枝の、討ち死を聞くよりも、その驚き大方ならず、初糸は吐息をつき、「思はざりき堅田ぬし、華籠の手に敗れを取りぬ。諸々の女房たちを、集へて商議せん」と、陣中に触れ流せば、触れに應じて皆至る。そが中に玉章は、少し遅れて至りしを、初糸はさし招き、かたはら近く座せしめたり。初糸やがて言ひけるは、「先の日鮑主の妹、軍令に従はず、■／■ほしいま、に戦を進めて、身を殺し命を滅ぼし、多くの軍兵をなくなしつ。今日また堅田が兵行舟、我が輩右へ／中より鋭気を挫きぬ。いと忌まはしきことならずや」と、言へども多くの女房ら、口を開ける者もなし。初糸つらく王章が、背の方をうち見やれば、しりえに従ふ三人の女、常に異なる顔容、座中の人々これを見て、笑ひを忍ぶを初糸は、玉章にうち向かひ、「御身が後ろに居並ぶは、そも何人にて候ぞ

や」と、言へば玉章玄妙を、呼び出だして言ひけるは、「こは我が幼き頃ほひ、もの学びを一つになし、同じ家に育ちつ、姉妹に等しき人にて、越前三国を預かりたる、大桑の玄妙也」と、言へばそばより滝夜刃が、「そは黄巾の賊婦らを、破りし婦人にあらずや」と、言へば玉章「左なり」と答へて、次へ(32ウ・33オ)／続き玄妙を引きあはし、先つ頃玄妙が、黄巾を破りつ、大功ありし事どもを、いと細やかに説き示す。初糸にはかに言ひけるは、「こは大内に由縁ある、苟且ならぬ人なれば、いざ／＼彼処に座し給へ」と、席を設けて与ふれば、玄妙かたく辞退して、「妾はひとりの県守なり。いかにしてか座席の位を、設け給ふの理あらんや」。初糸「いやとよさにあらず。妾御身が名と位とを、敬ふにはあらずかし。御身が曾祖は殿上にて、王子を出でて遠からぬ、いとも尊き人と聞く。◆／◆東の御殿にとりてすら、いたく功ある人なりき」と、言ふに玄妙これを謝すれば、筵の末に連なりたる、関路・飛鳥も手をつひて、玄妙が後ろに座す。諸人商議をするはしに、走り使ひの者来た



(32ウ・33オ 初糸、玄妙を重んじる)

りて、「只今華籠手の者従へ、関をば越えてこゝに来つ、いと長やかなる竿の先に、堅田が戦に締めたりける、赤地の錦の鉢巻きを、突きかけて持ち来たり、此柵外に陣を張り、戦ひを挑み候」と、聞くより初糸怒りを発し、「誰か行きて盗人女と、戦ふ者はあらざるや」と、言へばたちまち色糸【袁術】が、□／＼組下也ける河涉【愈涉】といふ女、ものをも言はず駆け出でしが、たちまちに「討たれたり」と、告ぐれば続いて若竹の、節根【韓馥】が手に従ひたる、君代【藩鳳】続いて出でたりしが、これも又討たれにければ、数多の女房色を失ふ。初糸は吐息をつき、「妾が手下に属したる、黄昏の夕顔【顔良】と、金時絵文車【文醜】は、折悪しく方々へ、軍兵催促に出でて帰らず。ひとりもこゝにあるものならば、ほしいまゝに華籠らに、勢ひは振らせじもの。今数多き女房たちの、内にてひとりも華籠が、手に立つ者はなきか」とて、ほとく嘆息なしぬれば、女房たちは答へもなく、口を噤みてゐたる折しも、はるか下座に声高く、「願ふは妾走りゆき、かの華籠が頭を斬り、見せまら



(33ウ・34オ 華籠、敵陣を望む)



せん」と罵りて、幕のもとに立ち上がる。次へ(33ウ・34オ)／**続き**初糸「彼は誰にかある」と、玉章に問ひたるに、玉章「彼は玄妙の、妹、閑路といふ者ぞ」と、言へば初糸「此乙女は、位ある者なるや」。「いやとよ彼は玄妙に、付きしのみにて位もなし」と、玉章が答ふるところに、初糸が妹、色糸は、先よりこゝに居あはせしが、此時やがて腕まくりし、膝立てなほし言ひけるは、「彼奴が何の故をもて、かくまでに広言吐くや。困居し給ふ方々の、内には人もなげなる言ひぶり。思ふに彼は位もなき、下衆女と見へたるに、舌長なる今の一言。ひと拳の手の内を、くれて頤、叩き鐘、はつち坊主よ乞食女」と、拳を固め振り上ぐるを、滝夜刃急ぎおし止め、「やよ待ちねかし色糸ぬし。あれなる乙女かくの通り、△印へ」／**△印より**口広く罵るからは、覚えなくてはかなふまじ。まづ試みに戦ひの、庭へ出だしつしかして後、もし勝たざればその時に、よし打ちなりと突きなりと、○中へ／**○下より**なし給ふとも遅からじ」と、止むればいよ、急ぎのほし、顔紅の色糸は、「御身が言葉極めてよからず。



(34ウ・35オ 色糸、関路の広言に立腹)

賤しき下衆女房を、もの／＼しげに戦場へ、出だして戦はするときは、華籠がために我が輩は、人を見ることをなしえぬものと、辱め笑はるゝ、その嘲りはいかばかり」と、言はしもたてず滝夜刃姫、「そは御身が僻事よ。関路とやらんが品形、とりまはしをよく見給へ、凡人ならぬところあり。華籠いかでこの人は、位なき者なりと、いふことを弁へ知らんや。御身が料簡極めて狭し」と、言へば関路もかたはらより、「我華籠が頭を斬らずは、その時にこそ我が頭を、次へ(34ウ・35オ)／続き芻ね給ふとも恨みはせじ」と、言ふに滝夜刃うちほう笑み、かたはらを見返りつ、軍卒に言ひ付けて、酒を暖めさせらたれば、「その酒一碗持て来よ」とて、一碗を関路に与ふるを、関路はこれをひと息に、飲み干して立ち上がり、「いま一碗の爛酒を、汲みてこゝに置き給へ。我その酒の▲□／▲□冷えざるはしに、たち帰らん」と言ひ捨てて、青龍丸の長刀を、小脇に挟み走り行く。人々は外面に当たりて、関の声鼓の音に、大地も裂くるばかりなるに、驚きて耳そばだて、軍卒に下知をなし、関路が

(35ウ・36才 関路、華籠の首を持参する)



罵る物首の、至るところを聞かせんとて、かの軍卒を遣はしたるに、その者いまだ柵外へ、至らぬはしに華籠の、首ひつ提げてたち帰る、関路はその首地上になげうち、につこと笑ひて立ちたりしが、かの酒いまだ暖かなれば、かつ驚きかつ喜ぶ、人々の中をおし分けて、飛鳥は席に躍り出で、「姉御お手柄でかされたり。祭の喧嘩を見しごとく、引物の華籠を、

八の巻へ (35ウ)

(八)

七の巻より何の苦もなく踏みつぶし、傘鉾の頭引き抜き、地に投げつけたる勇み肌、手古舞めきたる手際あり。此期を抜かず都へ踏み込み、董根おばアを生け捕りて、しめろやれこの人外めに、痛き目見するも心やり、木遣り音頭は我が身なり。続け人々又いつを、便々だらり待ちてをらん」と、いきり切つたる長槍に、あたりは危なき鼻の先、耳元に割れ鐘の、響くがごとき大声にて、色糸は叱りつけ、「こやなうおのれ此席に、団居せられし歴々の、女房たちすらへりくだり、おし譲られてひと言を、宣ひもせられざるに、唄の守の手につきたる、下衆女の分際もて、さばかりいまれ勇むこと、言ふに堪えたる痴れ者よ。われ又おのれを幕の外面へ、追ひ出だしくれんず」とて、立かゝるを滝夜刃が、◆／＼「こははしたなし、色糸ぬし。一度ならず二度三度、その雑言は聞苦し。功ある者を褒美するに、貴き賤しきの次へ」▼右下に「華籠が首」(36才)／「続きけちめあらんや。いらざる御身が差配也」と、言へば色糸不興顔にて、「さや

うに御身ら◇／◇最負して、唄守つれをもてなし用ひば、わなみはこゝを避け帰らん」と、言ひ捨て立つに滝夜刃も、「いかでかたゞひと言もて、大事をば誤らんや」と、玉章に目をくはし、玄妙・関路・飛鳥らを、伴はせつゝおのれゝが、陣屋に帰しやりければ、その夜多くの女房も、散りゝに退出けり。滝夜刃は忍びやかに、腰元を使ひとして、その夜酒肴をもたらしやり、三人の者を慰めけり。

それはさておき、華籠が手下に従ふ、敗軍ばら御殿に來たりて、利あらざる戦の模様を、逐一に聞くふるにぞ、**【李肅】**これを取り次ぎて、董根に言ひあぐれば、董根慌て否**【李儒】**と、調布とを招き寄せ、そのことを語らへば、否はとりあへず、「今大切な華籠に、討ち死にをさせ敵兵に、勢ひをつけたるは、全く初糸惣大将となりてもろゝの悪者を、集めしがなす所也。」**【袁隗】**左より初糸が叔母也ける、紀の長谷雄が妻槐**【袁隗】**あらはに姫のかしづきにて、御殿にありてことを計らふ、これ裡応外合とて、こなたにとりてはたよりよからず。

(36ウ・37オ 折鶴・薄水、槐一家を殺害する)



まづはや彼を除くにしかじ。御身自ら大軍を、引きて出陣し給へかし」と、言ふに○下へ／＼○中より董根その言葉、理ありと思へばたちまちに、塵塚の折鶴【李催】、凍解の薄水【郭汜】といふ、手下の女を招き寄せ、軍兵数多を従はせ、槐が家のめぐりをば、十重二十重におつ取り巻き、老ひも若きも嫌ひなく、ことごとく殺し尽くさせ、しかのみならず槐が首を、切り取りて立ち帰る。すでにして董根は、おのれ自ら兵の、あらん限りを従へつ、これを二手に引き分けて、□／＼□ひと手は折鶴・薄水に、預け相坂の関に向かはせ、みだりに斬り入ることをせしめず。今ひと手は、董根が嫁杏、玉川の調布ら、その他おち方の稠【樊稠】、からたうげ早濟【張濟】など、いふ女ともろともに、石部【虎牢関】の方へおし出だす。この所は東海道の、駅路にて諸方より、集まり来ぬる敵方を、遮り止むるに便りよし。調布は手勢を引ききて、醒井の寨に赴き、董根自らこゝにあり。さて又初糸が寨には、早馬来たりて此よしを、告ぐるを聞て数多の女房、次へ(36ウ・37オ)／＼続きうち集ひ



(37ウ・38オ 調布、筐と対陣する)



て語らふに、滝夜叉は座を抜き出で、「董根石部に屯を構へ、諸方より来たり集まる、味方の者を遮り止む。左

へ右よりしかれば味方は、兵を数多に引き分けて、ひと手がひと手に、向かふやうにぞ計りなん」と、言ふに初糸領きて、すなはち筐・橋立・鮑・遣水・文売、曾我菊・陶野・玉章らを、八手に分かちて石部に向かはせ、おのゝ敵に、向かはしむ。

滝夜叉は手勢を引き、その半途に行き来して、彼方此方を、下へ上より助け救はせたる程に、筐の前【王匡】は、先に手勢をおし出だせば、玉川の調布は、敵の向かふを見て大に喜び、陣頭に進み出で、迎へ戦はんありさまを、筐の前遥かに見やれば、丈なる黒髪を振り乱し、白綾の鉢巻き締め、連環鎖の着籠みを着し、上には唐錦の百花を織りたる、うち着をうち掛け、帯には紅絹のごきを用ひ、ひと振りの大長刀を、跨がりたる末摘花【赤兎馬】の、ひら首にさしつけて、風に嘶く名馬の勢ひ、あたりを払つて見へにけり。人の内には調布、馬の内には末摘花、人中の呂布、馬中の赤兎、その頃

ほひの稀ものにて、他には絶へてなかるべし。

筐かたみの前は此さまを見て、心の内恐れを抱だき、あとを見返りて言ひけるは、「誰たれか場中ばなかに走り出で、戦ふものゝあるやらん」と、言ひも終はらぬその内に、槍やりうち振りて出づる者あり。筐かたみの前これを見やれば、方円けだま【方悦】といふ乙女なりしが、調布にゆき向かひ、遂に手もなく次次へ(37ウ・38オ)／続つき討たれたり。筐かたみの前は此さまに、馬を蹴立て、逃げ入りしかば、調布「得たり」と長刀取り延べ、直ちに斬り入り斬り立つれば、四方八方追ひまくられ、大敗軍はいたんとなりたれば、調布は軍兵ぐんべいの、中を斬り割り追ひ撃つさまは、人なき境さかひに入ることく、いと安らかに見へにけり。

後ろの方に橋立【喬瑠】・遣水【袁遺】、めい／＼手勢を引き来たり、筐かたみの前を助くるに、調布は彼方かなた此方こなた、三手に当たつて兵つはものを、まとめてやがて引き退しりぞく。こなたの三手は人多く、討たせにければ遠く退き、八頭かちつの女軍一所に集まり、「調布は勇婦にて、彼に敵たふ者なし」と、とり／＼評議する折から、物見の軍卒走り来て、「調布

陣を繰り出だし、戦ひを挑み候」と、言ふに八頭の女房ら、おの／＼自ら馬に乗り、もとの寨にたち帰り、また兵つわものを八手に分かちて、三上山みかみやまの麓におし出だし、遙かに調布が一群ひとむれの、陣中を望み見れば、旗の幟のぼり吹き流し、風に招き翻ひるがへり、真一文字まいちもんじに突き来た。金目貫きんめぬき曾我菊【張場】が、手下の女房片貝かたがひ【穆順】が、調布に渡りあふ。

調布長刀振り回し、たちまち片貝を殴り斬る。八手の女房心胆こゝろを、失はざるんなかりける。縮括むぢく文壳ぶんがら【孔融】が手下の乙女、武世たけよ【武安国】と呼ぶ者、陣頭に進み出で、「我が身主人に愛せられ、十年の恩を受くるものから、死をもてこれに報ひまつらん。いで／＼」と言ひながら、大なる掛矢かけやひき提げて、調布に向かふたり。調布はこれを見て、武世と渡り合ふこと数合すかぶ、◇／◇調布がこむ長刀に、武世は腕たなひ斬りさげられ、掛矢かけやを大地にうち捨てて、逃ぐるを八手の女房たち、等しく来たりてこれを救へば、調布も○印へ／＼○印より引き退しりぞく。

八手の女房一同に、初糸によしを告ぐ。滝夜刃思案をめぐらし言ふやう、「調布が武勇当たる者なし。今十八



（38ウ・39オ 武世、調布に挑む）

手の女房たち、▲／▲中より二所に集まり商議して、調布・董根を擒にせん」との、評議区々なる所へ、走り使ひの者来たりて、調布が陣を進むるよしを、告ぐれば滝夜刃心得て、八手の人々を一つに合はし、調布に向かはしむ。調布は玉章が、陣を目がけて突きかゝるを、玉章剣をうち振りて、自ら迎へ戦ふたり。調布は目を見張り、声を放ちてかの長刀を、水車に振り回し、戦ふこと二三合、玉章は「敵はじ」とや、とく悟りけん慌てて逃ぐるを、調布は末摘花に、ひと鞭かれて追ひ来たる。此馬飛ぶこと風のごとく、すでに追ひ付き玉章の、背をめがけ突く長刀の、下かいくぐりて「さはさせじ」と、大声あげて罵るは、名にしおひたる飛鳥【張飛】也。

調布は玉章を捨てて、たちまち飛鳥に向かふを、飛鳥は、戦ふこと神意を搜り、戦ひたけなはなる所を、八手の女房飛鳥が槍法、次第に疲れ乱るゝを、見る調布、すこぶる精神をそへ、戦ふこと半刻ばかり、飛鳥はその性激しき女、大喝一声喚いてかゝれば、八手の女房、双方の争ひを見物するに、戦ひ五十合に至れども、いまだ勝



(39ウ・40オ 関路・飛鳥、調布と争う)

負を分かたざるに、関路【関羽】も怵へず青龍丸の、長刀を振り回し、調布めがけて薙いでかゝりつ。三人が争ふありさまは、丁字様にさも似たり。

すでに戦ふこと三十合、しかれども関路・飛鳥ら、かへつて調布が手練に及ばず。玄妙は此様子を見て、次へ(38ウ・39オ)／＼続き心秘かに思ふやう、「今我自ら手を下さずば、さらにいづれの時をか待たん」と、剣をうち振り飛びかゝり、調布めがけ斬つてかゝるを、しばらく支へたりけるが、三人に一人敵しがたく、戦ひやめて引退くを、「逃さじ、やらじ」と追ふ三人、八手の女房軍卒ばらも、等しく関の声をあげ、調布を追ひかくる。

■／＼調布は辛く逃げのびて、石部の陣へ引とりたり。

飛鳥はつらく敵陣を、仰き望めば西風に、翻りたる旗差物に、声張り上げて罵るやう、「彼処にくわん／＼と陣を立て、控へたるは他ならず、賊婦董根に疑ひなし。今調布を追ひたるに、彼は手強き所あり。まづかの賊婦董根を、捕らへんにしくことなし。

▲右の下へ／＼▲左よ
りこれ根を絶つて、葉を枯らすの道理」と、つぶやきな

から敵陣へ、突き入り突き入る一騎駆け。飛鳥が勇氣今にはじめず。しかれども敵陣より、射出だす矢先は雨のごとく、いかでか進むことを得ん。踵をめぐらし引かへす。八手の女房一同に、玄妙・閑路・飛鳥らの、黜あるを仰ぎたて、これを祝せしその後、使ひをもつて初糸の、もとへ詳しく知らするに、初糸聞いて大きに喜び、又堅田が方へ書簡をもつて、「兵を進め給へかし」と、言ひやりければ堅田は又、行舟・黄葉を引き連れて、まづ色糸が陣所に至り、色糸に対面なし、腰にさしたる軍扇を、抜き出だして地に描きつゝ、色糸にうち向かひ、「もと董根と妾が仲は、仇あるにあらねども、此度我が身を返り見ず、矢石を冒して戦ひつ、死をも厭はで戦ふこと、上は東の御殿の、御ために賊婦を討ち、下は御身が家門のために、仇を報ふにあらざるや。しかるを御身何人の、賢しらごとを聞受けて、兵糧を送り給はず、わなみに敗れを取らされしは、恨めしき心根よ」と、怨ずれば色糸は、いと恥ぢらひたる面持ちして、怖れくて言葉もなく、そのまゝ彼の賢しらせし、者を人して斬り

殺させ、堅田が為に託びたる後、酒の甕を開きつゝ、もてなさんとしたりし所へ、堅田が僕走り来て、「たゞ今いつかたの者なるか、使者と思しき女房の、御主人に見参と、陣屋の外面に立れたり。いかにはからひ候はん」と、〇／〇伺へば堅田はそのまゝ、色糸に暇を告げ、おのが陣屋に帰り来て、かの使者に対面す。かの人は是すなはち、董根が愛する所の、塵塚の折鶴【李催】也。堅田は襟をかき合はせ、一通りの口誼を述べ、「さて御身いかにして、我がこの陣所へ来ませしぞ」と、問ふに折鶴答へて言ふ、「妾来つるは他ならず、我が主人董根刀自の、敬ふ人は御身のみ。今妾を遣はしたるは、董根刀自に乙女子あり。御身の子息純友主【孫仁】に、娶せんとの心也。此こと受け入れ給はんや」と、言ふに堅田は

次へ（39ウ・40オ）／続きうち腹立ち、折鶴を叱りて言ふ、「こは聞くさへも腹立し。董根は天に逆ひ、道を弁へ知らざる女、東の御殿を傾けたるは、皆これがなすところ、我悉く彼が為に、親族の頭を刎ねて、獄門の木に晒し、もて天が下に謝せんと欲す。もし此言葉のごと

くならずは、我死するとも目を塞がじ。●／●いかで此逆賊と、親を結ぶの心あらん」と、いと声高に罵りけり。

〜此終はりの半丁は、作者新たに好みて描しむ。その故は此巻はじめより、女武者多く、実にご見物も同じ絵組みに、飽き給はんことを思ひてなり。めでたし〜。

墨川亭雪麿作(印)

香蝶楼国貞画(印)

(40ウ)



▼酒樽に「三国山」とある。

(40ウ)

《第四冊 後表紙封面》



▼奥目録「天保癸巳年孟春發行新神史」。前年のものとはほぼ同内容で、「癸巳」は入れ木と思われる。本作第三・四編を掲げるが、第四編上帙は天保五年、下帙は翌六年の刊行。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)